週刊ＲＯ通信

―― ２０１０年 ――

2010.01-2010.12　No.810-No.861

奥井　禮喜

ライフビジョン出版

週刊ＲＯ通信　２０１０年（2010. 01～2010. 12）　目次

変革か漂流か……6
新堕落論……10
経済学はどこへ……14
米国の新金融政策……18
軍縮論の先頭に立て……22
議長の出番……26
ワイマル共和国の教訓……30
春季労使交渉……34
普天間移設問題……38
政権交代の価値……42
政権交代がなかった罪か……46
民主党はマネジメントを見直せ……50

「友愛」と「絆」の普天間論……54
政治の analogy……58
労働時間政策と無気力……62
なぜ自民党支持率が上がらないか……66
最近の政治状況から考える……70
万博の思い出から……74
強欲と恐怖……78
テレビ文化……82
現代の神話……86
今、石橋湛山の卓見を……90
新聞による期待論の物足りなさ……94
組合に期待すること……98
新聞に期待すること……102
時代の気風……106
退屈な話の向こうに……110

終わって兜の緒を締めよ……114
政党政治論……118
政党政治論―2……122
それぞれの品位と気概……126
軟派の平和論……130
世論と戦争……134
大学生の就職活動……138
言葉が軽い……142
政党政治の歴史の一面……146
人格と政治意識論……150
難民か亡命か？！……154
日中関係……158
文学は進化を超越する！……162
無罪の推定……166
ルポルタージュ精神……170

読む内需……174
愉快な人生談義……178
ラピュータの人々！……182
外交の精神……186
日本的民主主義思想の浅い底……190
カチンの森事件……194
鎖国・開国の声高……198
面白いコラムが読みたい……202
そして誰もいなくなった……206
孤独の社会化……210
あとがき……215

no.810　2010.01.04

変革か漂流か

年が変わっても新規まき直しになるものではない。とはいえ世界中の人々が新規まき直しにしたいと願うのも当たり前で、そうした気分はおおいに大事にしたいのである。理想と現実、感性と理性が出会う時かもしれない。

ここ数日の新聞論調を眺めると、現状を変革と見るか漂流と見るか。あるいは変革にするか、漂流し続けるかという視点が浮上する。

不況は疑いなき現実である。不況にたいする不安と不満があるのは当然である。多くの政変は経済好調時にはまず発生しない。だからデフレ克服の戦略が見えないという批判は少なくない。しかし、いったい政治頼みで経済を好調にする奇策を駆使できると考えるのが妥当だろうか。

わが経済は三五兆円の需要不足だと喧伝される。ただし、その数字の本質が鮮明にされているとはいえまい。三五兆円の需要不足は経済活動が生み出したものであって、政治が生み出したのではない。

二〇〇八年版経済労働政策委員会報告で「市場経済礼賛」論をぶっていた日本経団連が、同二〇〇九年版では、「経済危機が資本主義経済にとっての脅威である」と書かざるをえなかった。まるで天変地異か、他人事である。

二〇〇〇年前後からの世界経済の好調は、先進国における実物経済の需要不足を金融至上主義で糊塗していたものである。二〇〇五年前後には警鐘が鳴らされていたが、果たして経済人主流が真剣深刻に考えていただろうか。

一九九〇年代バブル崩壊以後、働く現場はまことに惨状を露呈している。企業は労働市場の主導権をとり、非正規労働、長時間労働、果ては不払い労働に依存した。賃金コスト抑制で労働者の実質所得は大きく後退した。

―倉廩（そうりん）実ちて礼節を知り、衣食足りて栄辱を知る（管子）―というが、現実には豊かであれば安直に流れ、経営改善、とりわけ働き方についての無関心が増大するという傾向にあるのを危惧する。

雇用問題は、大方はコストで論じられるのであるが、すでにそこに経営のサボタージュが露見している。なぜならそれは、経営革新の①生産方法革新②新製品開発③新販路開拓が不十分だった結果として現れるからである。

たとえば、新製品開発に挑戦しているとき、その担当部門は確実に「雇用不足」状態になる。仕事の質・量いずれも大きくなるからである。逆に言えば、何かに挑戦せずマンネリ化しているから雇用過剰状態になる。

不況になって守りの姿勢に入れば、雇用過剰はスパイラルで進行する。不況になれば企業内では出すものは鼻血もださない方針で、上から収益確保の大号令がかかるのが常套だが、それで活路が見出せるものではない。

需要不足をマクロで考える必要もある。働く人々は企業内の機械・装置ではない。彼らは「消費者」である。賃金抑制が進行すれば、消費者としての行動を自縄自縛するのと等しい。

まして、企業内において、「儲かる・儲からない」論が蔓延しているから、働く人自身において、消費者意識が育つはずがない。供給側意識にどっぷり漬かっている人が消費者としての行動を活性化するわけがない。

目下、経済成長論がおおいに主張されるが、いったいなんのために経済成長させるのか。人々の生活が向上するからこそ、人々は気持ちをこめて働くのではないのか。まして「会社がこけたら元も子もない」論を喧伝すればするほど、人心は萎縮して、

ますます需要減退に拍車がかかる。

都市問題を考えてみよう。過密過疎が問題視されるようになったのは、遠く一九六〇年代からである。大都市には立派なビルが林立して、ビルのなかは快適、気分がよろしいから長時間労働していても、いや、それゆえちっぽけな自宅になど帰りたくないのかもしれない。

しかし、たとえば上空から東京を眺めれば、まことに貧弱な街並みであって、たまに欧州あたりの都市景観をテレビで見ると、彼我の格差に唖然呆然とする。「ジャパン・クール」などというけれど、大都会をゆったり散歩して楽しむなんて気分になりはしない。欧州には昔から「都市が人を育てる」という名言がある。われわれは何か間違っているのではないのか。

世界的バブル崩壊を僥倖として、単純な経済成長論に与するだけでなく、まさに「経済は人間のためにある」という当たり前の理屈を見直したい。

新堕落論

no.811　2010.01.11

新宿からさして遠くないＪＲ王子駅前に飛鳥山公園がある。桜の名所である。季節には車窓からなかなか見事な桜が楽しめる。駅ホームに降り立ったのは初めてだ。公園下に、立派にみすぼらしい長屋的飲み屋街がある。

さくら新道という看板が見えた。ホームを歩きながら眺めればかなりの雰囲気が漂う。まるで敗戦後がそのまま貯蔵されているかのようで、懐かしい。

徹底的に赤錆たトタン壁がホームと並んで威容を誇っている。新宿にも思い出横丁がある。敗戦後、直ちに香具師尾津喜之助親分が立ち上げた焼け跡マーケット、「やみ市」の名残である。ときどき立ち寄って焼き鳥などで一杯飲んだことがある。はじめての人は安いだろうと思うが、実際はさして安くはない。少々くたびれかけた中年以後のおじさんが、そこはかとなく青春を回顧しつつ楽しむという味わいなのである。

この種の街並みはきれいではないし、わびしさが漂うのでもあるが、それはそれでなかなかよろしい。昔は「駅裏」という街並みがいたるところにあった。いずれ劣ら

ぬ、侘びならぬわびしさがあって、妙に安堵感があった。もっとも、幼年時代にまで戻ると、なんだかおっかなかったが。

ＴＶ「ウィーンフィル・ニューイヤーコンサート二〇一〇」で、欧州街並みの景観を見て瞠目する。「美しき青きドナウ」が演奏され、独シュワルツワルトからウィーン、ブタペスト、ベオグラードを流れ抜けて黒海へ注ぐ二、八六〇㎞のドナウ川の清流についため息が出た。わが国は今後観光に力を入れるらしいが、美しい生活環境作りこそが必要ではあるまいか。ま、トタン壁的横丁は、それはそれでなかなか親近感がもてるのであるけれど。

みすぼらしいのは立派ではなくてみすぼらしいのである。しかし、敗戦後のみすぼらしさというのは、凛としたものがあったのだ。

完膚なきまでに叩き潰されて、「一億一心・火の玉」で「一億玉砕」の決意などと吼えていた、怪しい強がりなどは雲散霧消して、あたかも長年悩んでいた肩凝りがスッと解消したような心地もあったのではないか。みすぼらしさこそが正真正銘の正直である。「正直の頭に神が宿る」のであって。

かの敗戦で、あれこれ無理を重ねて厚化粧して突っ張っていたものが、消えた。渡

辺一夫先生が「ああ、そうだったのか、やはりそうだったのか」と呟かれたときの、空虚というものは、内容のある空虚であったろう。それがわれわれの直近の原点なのに違いない。

敗戦後の数年は、もっとも精神的に充実して、何もないのに、張り切っていた時代であったと、何かで読んだ。「国敗れて山河あり」と素直に心が開けたのではあるまいか。今やこの「山河」を顧みる人は多いであろうか。

開高健さんは戦時中の辛さ、極貧生活について、執拗なまでに書いたが、それは単に懐古趣味ではなく、出発点をいつまでも忘れないようにしようとのメッセージではなかったのか。

何もない、空虚こそが洗心の時ではあるまいか。子供の純真さが尊ばれるのは、素直な空虚だからではあるまいか。「無」こそが本当の出発点なのだ。坂口安吾が「堕落論」で、「堕ちるとこまで堕ちろ」と吼えたのは、なかなか無に到達しえない俗ゆえの叫びではなかっただろうか。

明治の人は無から出発したからこそ、偉大な力を発揮した。その遺産に乗っかってのぼせ上がっていたから転落した。敗戦後の人も無であったから威力を発揮した。そ

の後のわれわれは、その遺産に胡坐をかいているから力が出ないのではあるまいか。

新聞を読むとデフレ大変論のオンパレードだが、「悪貨が良貨を駆逐する」という言葉のほうが大事じゃないか。超インフレ、バブルが弾けて、目下は厚化粧を洗い落としたようなものではないか。小手先対策で問題解決などしないほうがよろしい。

庶民がデフレを歓迎すると経済新聞は嘆くが、嘆くのが間違いなのだ。経済原則である、「需要と供給の均衡」を無視して、供給側の都合だけで怪しい需要を乱造し、見事にこけてしまったのだという認識を忘れてはならない。不況だ、デフレだと騒動するが、まだまだ堕ちるところまで堕ちてはいない。安吾の咆哮をまたまた思い出した次第である。

経済学はどこへ

no.812　2010.01.18

最近、またぞろ「坂の上の雲」みたいな論調が出ているらしい。いわく目下閉塞感の時代であり、未来に夢なり希望なりを掲げて挑戦した時代の人々の生き方に憧れる。そうあるべきだというのであろう。

出世や金儲けを目標としない若者が増えて、元気がないと嘆く識者も少なくない。ただし、出世や金儲け自体は、夢だ、希望だというには、さほど大きなものではない（はずである）。

事実、明治・大正・昭和の初め辺りの本を読むと、出世・金儲けに価値を置いて行動する人間が高い評価をうけているようには見えない。むしろ、出世主義、成金として批判されているほうが多い。

ここしばらく、気がかりなのは、経済学者たちがいかにも市場経済にどっぷり浸っていて、市場の動き以外にはさしたる関心を示さないことである。もっとも、これは以前から指摘されてきたことでもあるが。

経済学は専門領域としては、もちろん経済現象を研究するのだが、そこでは、利己的個人が経済領域において合理的な経済行動をとることが前提である。しかし、今やそれだけで十分というわけにはいかなくなった。

地球人口は現在六七億人、二〇五〇年には九一億人と予想されている。環境問題に関心が強くなっているが、それは畢竟人口問題であるともいえる。地球を破壊しつつあるのは人間であって、それ以外ではない。

人間が生活する以上経済生活をせねばならず、人間が活用する資源エネルギーは間違いなく廃棄物に転換する。年間一、五〇〇ドル以下で暮らす人々が四〇億人おられる。この人々の生活向上は喫緊の課題である。

現在の不況は国内において三五兆円の需要不足だという。逆にいえばそれは供給過多ということでもある。先進国が、ひたすら経済成長を求めればよろしいというわけにはいかないのではないか。

水問題も深刻である。人間は一日五〇リットルを最低限必要とするが、すでに一一億人が五リットル以下で暮らしており、国連推計によれば二〇二五年には世界人口の三分の二が水不足に見舞われる。

この問題は、生活用水不足のみならず、食糧、生態系への影響、水の汚染、洪水被害などと深く関係する。わが国の輸入食糧生産に必要な水量は年間数百億立方mにも及ぶとされる。

たとえば、農業灌漑について、綿花生産によってアラル海が死滅し、米作に乗り出したインド農地や、小麦生産で米国農地の水源が枯れるという事態が発生している。食糧生産自体が水を枯渇させるのである。

われわれは気がつけば生まれていた。まさしく他律的に人生に放り込まれたのである。しかし、現在すでに理解できるようになった、これらの生存を律する課題を思えば、ただ利己的に生きることは理性的生き方とはいえない。

「知・情・意」をもつ人間である。ただ「homo oeconomicus」たればよろしいというのでは理性的破滅である。経済学においても、理性的人間としての生き方を主体的に構想するべきではあるまいか。

かつて日本人は先進国に「追いつき追い越せ」という心がけで走ってきた。今は少なくとも先頭的位置にある。途上国と同様の発想で、トップランナーをめざして走るだけでは進歩がない。

人間が社会的存在である。ただ経済的に生きるのみではなく、有意義な実存をめざすべきである。ましてや、学問を生業とする方々に必要な倫理は、利己的損得問題に停頓するのではなく、社会的存在としての人間の生き方に貢献するものでなくてはなるまい。

もちろん、これは経済学者だけの課題ではない。すべての学問を生業とする人々は、人類の社会的紐帯について、人類の未来について、責任をもつ学問的成果を追求するべきではなかろうか。

竹中教授は、相変わらずひたすら経済成長一本槍で生活向上論を展開される。今はそれでよくても、確実に地球破壊を推進することになるという認識を持っておられないらしい。金融の暴走無視、「改革」時代の責任無視であっけらかんと発言されるのを見ていると、経済学者が単なる経済人に過ぎないようにみえて、経済学の在り方について考えた次第である。

no.813　2010.01.25

米国の新金融政策

米政府が銀行と証券の垣根を高くする方針を打ち出した。銀行がヘッジファンド・未公開株ファンドへの出資・保証を禁止する。ハイリスク金融商品などの売買を禁止する。金融危機後、米政府は七、〇〇〇億ドルの金融救済資金を出した。うち一、一七〇億ドルはすでに損失になった。

オバマ政権が人気低落で、一方、米国ではウォール街批判が強くなっているので、人気取り政策・ポピュリズムだとの批判があるが、そうだろうか。

今回の不況の原因は米国発金融危機である。米国は、金融による世界市場の形成を推進してきた。まさに「米国金融会社」である。

二〇〇〇年以降の世界的好況の本質は「信用バブル」を背景としていた。いつバブルが崩壊しても不思議はなかった。しかし、責任ある大方の関係者は見て見ぬ振りをし続けていた。ここのところをくれぐれも失念したくない。

バブル崩壊後、世界金融市場の統御システムはどこにもなく、つまりそれがもたら

す責任を取る人や機構はどこにも存在していなかったという恐るべき実態が露呈した。二〇〇八・九・一五以降、世界のあらゆる信用バブルが崩壊した。

それまで金融機関は自己資本の何十倍もの元手を駆使して投資を膨張させ、収益拡大に走った。バブルを膨張するだけ膨張させ、とてつもなく大きいものにしておけば、それの後始末は個別企業の手を離れて、国家的・世界的におこなわざるをえないということを見越した上での金融活動が続けられた。

バブル崩壊後、まさに世界経済は、そのシナリオに沿って動いている。世界中で「保護貿易主義に対して警戒せよ」「金融機能蘇生に全力を尽くせ」、国内的にも「政府は経済成長戦略を推進せよ」などが大声疾呼されて現在に至っている。概観すれば、結局税金にツケが回されたに過ぎない。

そもそも「信用」と「バブル」が結託したことの深刻さを無視するわけにはいかない。資本主義は資本を基盤とした経済制度である。必然、大資本は小資本よりも信用される。信用がバブルになったのでは話にならない。

それゆえ、信用バブルの崩壊は歓迎すべきである。今後は、信用を再建しなければならない。信用再建には時間が必要である。世界金融機関の損失は四兆ドル（400 兆

円）とされ、わが国のＧＤＰの八〇％に相当するが、これを逆に見れば、実物経済をそれだけ凌駕するバブルが発生していたのである。

経済復調には時間が必要だ。第一に、単純に経済成長だけを志向すればよいということにならないからだ。いまや資源・エネルギー・環境問題を無視できない。今日、世界危機の３Ｋとは、核・環境そして「金融」である。

第二に、少なくとも現在よりも金融機関の活動を、世界的に統御できる仕組みを作らねばならない。ところが、それを強烈に推進すれば、確実に景気回復の足かせになるという反論が出る。規制緩和論の登場である。

一方、金融というものは、もともと実体があやふやである。とりわけ信用を不可欠としている。にもかかわらず、「儲かる」論のスポットライトに目が眩んで、野放図な信用拡大に走りやすい。かくして金融危機が発生する。まさに資本主義発生時から性懲りもなく同じパターンを繰り返してきた。規制緩和は自由放任に通じやすい。規制ならぬきちんとした規則が必要だ。

昨今世界株式時価総額は四六兆ドル、金融危機前水準に迫っている。これは景気回復の意味だけでみれば歓迎すべきであろうが、実物経済がそこまで高まったとは到底

考えられず、またまた新たな火種を抱えつつあるとみなければならない。なぜなら、先進国経済は新たな発展軌道に乗っているわけではない。なおかつ途上国が一気に発展したわけでもない。

不況は厄介だが、それ以上に急激な景気回復を願うほうがよほど深刻である。活況は高血圧・糖尿病に似ている。バブル崩壊は痛風である。痛風は体質的欠陥の警鐘である。真因を無視して急激な経済成長を期待するのは、痛風の痛みを止めて大酒を飲むのと同じだ。次のバブルを招くだけである。

経済は人間のためにある。なぜなら人間は消費せねばならぬ、消費するために生産しなければならぬ。この順番を間違えて、経済（儲け）至上主義に陥っているのであれば、世界経済は到底健全な発展を遂げられない。

「真っ当な経済活動とは何か」を求め続けねばならず、その一つとして米政府の新方針を歓迎する所以である。